

# 現代の漢方医療を支える、6人のサムライ

医師、薬剤師、アナリスト、ウェブサイト運営……、それぞれの立場は異なっているけれども、現代の医療の現場で漢方を役立てたいという熱い思いは共通している。

相磯貞和

慶應義塾大学医学部 漢方医学センターセンター長

## 国際化に力を注ぎ、役割を發揮できる機関に。



Sadakazu Aiso

1951年東京都生まれ。76年慶應義塾大学医学部、80年同大学院博士課程内科学専攻を卒業後、市中病院で臨床内科医に。慶應義塾大学医学部解剖学教室を経て、88～92年スタンフォード大学微生物学免疫学教室で研究。92年解剖学教授。2011年より現職を兼務。



漢方医学センターの棚には、生薬の見本や資料などがずらりと並ぶ。センターでは、海外の留学生を積極的に受け入れ、漢方の国際化を推進。教育・研究・診療の機能を備えた、日本でも数少ない専門機関である。

今年4月、相磯貞和氏は慶應義塾大学医学部にある漢方医学センターのセンター長に就任した。もともと消化器内科の専門医であり、解剖学教室教授でもある。長年の臨床経験のなかで、現代医療における漢方の役割をあらためて認識するようになったという。

### 西洋医学と折り合いをつけ、取り入れる道筋をつける。

「私たちの学生時代には漢方を教わる機会はありませんでした。そして、患者さんに向き合っているうちに、西洋医学の限界を感じる場面も数多く経験しました。『自分のできることだけで医療を進めていいのか？ もっと何かしなければならぬのではないか？』と考えるうち、次第に漢方に興味をもつようになったのです」

慶應義塾大学病院を訪れる外来の患者の中にも、『漢方治療を』と自ら希望する人が増えてきた。

「大学として、まず、これまでの漢方の使われ方を考えること。そして、西洋医学と折り合いをつけながらどのよ

うに漢方を取り入れていくかという道筋を立てることが、漢方医学センターの役割と考えています」

センターの沿革は、1991年慶應義塾大学医学部に漢方相談室が設立され、週2回の診療が行われるようになったことに始まる。そして93年、慶應義塾大学病院に、「現代医学のなかで漢方治療をより良く生かす」を理念として漢方の外来が誕生した。

「診療だけではなく研究も重視するということで、93年『東洋医学講座』が設立されました。漢方のメカニズム解明や新しい薬効の発見など、基礎から臨床研究まで幅広い取り組みを進めています」

一方、2002年に文部科学省の医学教育モデル・コア・カリキュラムに漢方教育が取り入れられる以前から、卒前教育として選択で漢方医学を学ぶための取り組みも進めてきた。

「4年前に『東洋医学講座』は『漢方医学センター』として生まれ変わり、漢方医学の教育・研究・診療の拠点とされています」

漢方医学センターでは、日本の伝統医学としての漢方の国際化に大きな力を注いできた。欧米や東南アジアなどから多くの留学生を受け入れ、研究者を招き、また海外で臨床試験を行うなどの活動を進めている。

「漢方は、中国や韓国などの伝統医学とはスタンスが少し違っています。そうしたなかで我々としては日本独自の漢方医学が、世界の中で役割を發揮できるようにすることが使命と考えてきました。漢方医学が本場に西洋医学とマッチしながら、世界の人々の医療に役立てる『国際的なハーモナイゼーション』に取り組んでいます」

単に漢方を世界に普及させるだけではなく、西洋医学の中の漢方の「立ち位置」を探るうとしているのだ。

「たとえば、がんに対する化学療法や放射線治療などは大きく進みましたが、治療の副作用は苦しいものです。漢方薬はそうした副作用の緩和に役立つことが多数報告されており、今後この分野において世界中で取り入れられたいくつかもありません」